

云う様なものは、そういう風に印象を構成する訳には行かんだらうと。私は其攻撃に対しては、こう答える。——そういう *uneasy* な状態はあるには相違ない、ないが、こゝにはそんな事を考える必要はない。よし帝王の *uneasiness* が精神的であつても、そう考える必要はない。必要はないといふよりもそんな余裕はない。*uneasy* の下に *lies* 即ち横わるとある。*lies* と云うと、有形的な物体に適用せらるゝ文字である。だから *uneasy* と読んで、どちらの *uneasy* かと迷う間もなく、直ぐ *lies* という字に接続するからして *uneasy* の意味は明確になつてくる。すると又こう非難する人が出るかも知れぬ。——*lies* にも両様がある。有形物に就いて云う事は無論であるが、無形物に就いても能く使う字である。だから *uneasy lies* では君の云う様に判然たる印象は起つて来ない。此非難に対する私の弁解はこうであります。*uneasy lies* では印象が起らぬと云うなら第三字目の *head* = と云う字を読んで見るがよからう。*head* は具体的のものである。よし *head* までも比喩的な意味に解せられるとしても *uneasy lies the head* と続けて読んで、しかも此 *head* を抽象的な、能力とか知力とか解釈する者はあるまい。誰でも具体的の髪を生えた頭と解釈するであろう。*head* を具体と解する以上は *lies* も無論有形的の *lies* する有様に相違ない。して見ると *uneasy* も亦形態に關係のない、目に見えぬ意味とは取りにくい。しかも其 *uneasy* なる有様はいつまで縮くか無論わからないが、よし長時間縮く状態にしても、苟も縮いている間は、何時までも目に見える状態である。いつでも見える状態であるからして、其いづれの一瞬間を截ち切つても其の断面は長い全部を代表する事が出来る。語を換えて云えば、十年二十年の

状態を瞬間の間につづめたもの、煮詰めたもの、煎じ詰めたものを脳裏に呼び起すことができる。そこで此煮詰めた所、煎じ詰めた所が沙翁の詩的な所で、読者に電火の機鋒をちらと見せる所かと思ひます。是は時間の上の話であります。長い時間の状態を一時に示す詩的な作用であります。

所で沙翁には今一つの特徴があります。上述のが時間的なるに對して是は空間的と云うてもよからうと思ひます。即ちこう云う解剖なのです。帝王という字は具体の名詞か抽象の名詞かと問へば、誰も具体と答えるだろうと思ひます。成程具体名詞に相違ないです。けれども只、具体的だと承知する許りで、明瞭な印象は比較的出にくいのです。帝王の画を眼前でかいて見ると云われても、すぐと図案はこしらえられんのだらうと思ひます。私共の脳中には此帝王と云うものが頗る漠然として纏らない図になつて畳み込まれて居ます。所々 *the head that wears a crown* と云われんと、帝王という觀念が急に判然とします。なぜかといふと、今迄は具体であると云う事文が解つて居たけれど、局部の智識は頗る曖昧で取とめがつかなくしたのであります。恰も度の合わぬ眼鏡で物を見る様に、其物は独立して存在して居るが、他の物と独立している事文が明瞭で、其物の内容は醜態として居つたのであります。所が *Uneasy lies the head that wears a crown* と云われたので焦点が急に極つた様な心持があるのであります。帝王と云えば個人として帝王の全部を想像せねばならぬ。全部を想像すると勢ぼんやりする。ぼんやりしない為めに、局部を想像しようとする、局部が沢山あるので、どこを想像してよいか分りません。そこで沙翁は多くある局部のうちで、ここを想像するが一番いゝと教えて呉れたのであり

ます。其教えて呉れたのは、帝王の足でもない、手でもない、乃至は背骨でもない、もしくは帝王の腹の中でもない。彼が指して、あすこ丈を注意して御覽、king がよく見えると教えてくれた所は、燦爛たる冠を戴く彼の頭であります。此注意をうけた吾々は、今迄全局に眼をちらつかせて要領を得るのに苦しんでいたのに、かく注意を受けたから、試に其方へ視線をむけると、成程kingが見えたのであります。明瞭なのは局部に過ぎぬけれども、此局部がkingを代表して然るべき精髄であるからして、ここが明瞭に見えれば全体を明瞭に見たと同じ事になる。取も直さず物を見るべき要点を沙翁が我々に教えて呉れたのであります。此要点は全体を明かにするに於て効力があるのみならず、要点以外に気を散らす必要がなく、不要の部分を悉く切り棄てる事も出来るからして、読者からいえば注意力の経済になる。此要点を空間に配して云うと、沙翁はkingという大きなものを縮めて、単なる「冠を戴く頭」に変化させて呉れたのであります。かくして六尺の人は一尺に足らぬ頭と煎じ詰められたのであります。

して見ると沙翁の句は一方に於て時間を煎じ詰め、一方では空間を煎じ詰めて、そうして鮮かに長時間と広空間とを見せてくれて居ります。恰も肉眼で遠景を見ると漠然として居るが、一たび雙眼鏡をかけると大きな朧大なるものが奇麗に縮まって眸裡に印する様なものであります。そうして此雙眼鏡の度を合わして呉れたのが即ち沙翁なのであります。是が沙翁の句を読んで詩的だと感ずる所以であります。(有朋堂版「國語の力」、二六―三一、ただし、語句・読点の脱落しているものについては、引用者において、適宜補った。それらの箇所はかなり多く、ここに一括して注することを保留

した。)

右の漱石の解釈例の引用にあたり、垣内松三先生は、「材料は英文の読方の例であるが、日本文と異った表現形式の実例が日本文の読方の場合に適用するかというような疑を挿む必要が無い。こゝにはその取扱ひ方を主題として考えるのである。」(有朋堂版「國語の力」、二六)と、ことわっていられる。

右の引用は、夏目漱石の講演記録「文芸の哲学的基礎」(明治40年4月、東京美術学校において講演したもの。それに漱石みずから手を入れて書き直し、同年5月4日から6月4日まで、二七回にわたり、「朝日新聞」紙上に連載された。)からなされている。

この漱石の講演「文芸の哲学的基礎」について、小宮豊隆氏は、「『文芸の哲学的基礎』は、言わば漱石の『文芸論』の補遺である。」と述べ、また「漱石は、中川芳太郎の書いた『文学論』に筆を入れていううちに、朝日新聞から入社の話があり、結局大学と一高とをやめて朝日の社員となることを決意し、ほっと一息つくことができるようになった際に、東京美術学校から講演をしに来てくれと言つて来たので、むしろ科学的に取り扱われた『文学論』の序論のようなものとして、この『文芸の哲学的基礎』を一応纏めて話をする気になつたものではないかと思う。」(以上、「漱石全集」第二十卷、昭和32年2月27日、岩波書店刊、「解説」、二六三―二六四)とも述べている。

この講演の中で、漱石は、文芸における理想と技巧の問題に論及し、とりわけ「理想」について精細に論じたのち、つぎのように述べている。

「理想とは何でもない。如何にして生存するが尤もよきかの問題に對して与えたる答案に過ぎないのであります。画家の画、文士の文、は皆此答案であります。文芸家は世間から此問題を呈出されるからして、色々の方便によつて各自が解釈した答案を呈出者に与えてやるに過ぎないのであります。答案が有力である為には明瞭でなければならん、折角の名答も不明瞭であるならば、相互の意志が疎通せぬ様な不都合に陥ります。所謂技巧と稱するものは、此答案を明瞭にする為めに文芸の士が利用する道具であります。道具は固より本体ではない。

そこで諸君はわかつたと云われるかも知れぬ。又はわからぬと云われるかも知れぬ。分つた方はそれでよろしいが、分らぬ方には少々説明をしなければなりません。只今技巧は道具だと申しました。そう一概に云うと明瞭な様であるが退いて考えると中々わかり悪い。技巧とは何だと聴かれた時に、大抵困ります。普通は思想をあらわす、手段だと云いますが、其手段によつて発表される思想だからして、思想を離れて、手段文を考ふる訳には行かず、又手段を離れて思想文を拝見する訳には無論行きません。夫で段々論じ詰めて行くと、どこ迄が手段で、どこからが思想だか甚だ曖昧になります。丁度此白墨に即いて云うと、白い色と白墨の形とを切離す様なもので此格段な白墨を目安にして論ずると白い色をとれば形はなくなつて仕舞いますし、又此形をとれば白い色も消えて仕舞います。兩つのは二にして一、一にして二と云つても然るべきものであります。そこで哲理的に論ずると中々面倒ですから、分り易い為めに実例で説明しようと思ひます。先達で大学で講義の時に引用した例がありますから、一寸それで用を弁じて置きます。

茲に二つの文章があります、最初のは沙翁の句で、次のはデフォーと云う男の句であります。

之を比較すると技巧と内容の區別が自ら判然するだらうと思ひます。」「同上「激石全集」第二十卷、六七—六八、傍線は引用者。）」

右の引用によつてもわかるように、文芸における技巧の問題を平明にかつ具体的に究明しようとして、沙翁の句をとりあげたのであつた。しかも、それをデフォーの文と對比させることによつて、説明（—解剖の考察）を進めているのであつた。

激石は、さらに両者の文について、つぎのように説きおこしている。

「Uneasy lies the head that wears a crown.

Kings frequently lamented the miserable consequences of being born to great things, and wished they had been in the middle of the two extremes, between the mean and the great.

大体の意味は説明する必要もない迄に明瞭であります。即ち冠を戴く頭は安きまなしと云うのが沙翁の句で、高貴の身に生れたる不幸を悲しんで、両極の中、上下の間に世を送りたく思うは帝王の習ひなりと云うのがデフォーの句であります。無論前者は韻語の一行で、後者は長い散文中の一句であるから、前後に關係して云うと、種々な議論も出来ませんが、此二句文を獨立させて評して見ると、其技巧の点に於て大變な差違があります。それはあとから説明するとして、二句の内容は、二句共に大同小異である事は、誰も疑わぬ程に明かでありましょう。だから思想から見ると雙方共に同様

と見ても差支ないと思います。思想が同様であるにも関わらず、此二句を読んで得る感じには大変な違があります。私は先達で中デフォの作物を批評する必要があつて、其作物を讀直すときに偶然此句に出合ひまして、不図沙翁のヘンリー四世中の語を思い出して、其内容の同じきにも関わらず、其感じに大変な相違のあるに驚きました。が、何故こんな相違があるかに至つては解剖して見る迄は判然と自分にもわからなかつたのであります。そこで是から御話しをするのは私の当時の感じを解剖した所でありませう。

沙翁の方から述べますと―彼の句は（後略）「同上「漱石全集」第二十卷、六八―六九頁）

これによつて、漱石が沙翁の「ヘンリー四世」中の一句を解剖しようとした意圖がどこにあつたかを理解することが出来る。沙翁の一句をあくまで詳細に解剖していく動機と必要も諒解される。

なお、前掲「国語の力」所収（引用）の文章には、引用に際して若干の省略が見られる。たとえば、

※1 のつぎに、漱石の原文では、「そこが一つの手際でありませう。」とあり、※2 のつぎには、「例えば椅子の足の折れかゝつたのに腰を掛けて uneasy であるとか、」が入れられている。また、※3 は、漱石の原文では、「要領を得るのに苦しんでいたのに、」でなく、「要領を得んのに苦しんでいたのに、」となっている。（なお、原文・引用文の間に、字句・読点のちがいが見られるが、今ここでは保留しておきたい。）

さて、漱石は講演「文芸の哲学的基礎」において、沙翁の句に對比させた、デフォの句については、つぎのように述べている。

「所がデフォの文章を讀んで見ると丸で違つて居ります。此男

のかき方は長いものは長いなり、短いものは短いなりに書き放して毫も煎じ詰めた所がありません。遠景を見るのに肉眼で見えて居ます。度を合せぬのみか、雙眼鏡を用いようともしません。まあ智慧のない叙方と云つてよいでしょう。或は心配して読者の便宜をはかつて呉れぬ書き方、呑気もしくは不親切な書き方と云つても悪くはありませんまい。もしくは伸縮方を解せぬ、弾力性のない文章と評しても構わないでしょう。汽車電車は無論人力さえ工夫する手段を知らないで、どこ迄も親譲りの二本足でのそ／＼歩いて行く文章であります。従つて散文的の感があるのです。散文的な文章とは馬へも乗れず、車へも乗れず何等の才覚がなくて、只地道に御拾いで御出になる文章を云うのであります。是は決して悪口ではありません、御拾ひも時々結構であります。只年が年中足を播木にして、火事見舞に行くんでも、葬式の供に立つんでも同じ心得で、てく／＼やつて居るのは、本人の勝手だと云えば云う様なものゝ、あまり器量のない話であります。デフォは甚だ達筆で生涯に三百何部と云う書物をかきました。まあ車夫の様な文章家なのです。

是で二家の文章の批評は了ります。此批評によつて、我々の得た結論は何であるかと云うと、文芸に在つて技巧は大切なものであると云う事でありませう。もし技巧がなければ折角の思想も、気の毒な事に、左程な利目が出て来ない。沙翁とデフォは同じ思想をあらわしたのでありますが、其結果は以上の如く、大変な相違を来します。思想が同じいのに是程な相違が出るのは全く技巧の爲めだと結論します。近頃日本の文学者のある人々は技巧は無用だとしきりに主張するそうですが、未だ明瞭なる御考えを承つた事がないから、

何とも申されませんが、以上の説明によると文芸家である以上は、技巧はどうしても捨てる訳には、参るまいと信じます。そうして以上の説明は決して論理其他の誤謬を含んで居らんと信じます。」

(同上「漱石全集」第二十卷、七二―七三頁)

このように、沙翁・デフォー両者のそれぞれの句を批評し、文芸における技巧の問題について、結論を導きだし、漱石はさらに技巧を無用視する一派の文壇人に対し、つぎのように述べている。

「有名な人の作曲さえやれば、どんな下手が奏しても構わないと云う御意ならば文章も技巧は無用かも知れませんが、私にはそうは思われません。そうして技巧を無用視せらるゝ方のうちには人生に触れなくては駄目だ、技巧はどうでもよい、人生に触れるのが目的だと言われる人が大分ある様ですが、是も未だ明瞭な説明を承った事がないから何の意味だか了解出来ませんが、此言葉を承る度に何だか妙な心持がします。只触れろ〜と仰があつても触れる見当がつかなければ、作家は途方に暮れます。無暗に人生だ〜と騒いで、何が人生だか御説明にならん以上は、火の見えないのに半鐘を擦る様なもので、一寸景気はいい様だが、どいた〜と駆けて行く連中は、あとから大に迷惑致すだろうと察せられます。人生に触れると御注文が出る前に、人生とはこんなもの、触れるとはあんなもの、凡てのあんな、こんなを明瞭にして置いて俗斯様な訳だから技巧は無用じゃないかと仰せられたなら、其時始めて御相手を致しても遅くはなからうと思つて、それ迄は差し控える事に致して居ります。」(同上「漱石全集」第二十卷、七八―七九頁)

漱石においては、一貫した論旨を展開させており、文芸における技巧有用論をいっそう明確にしていくため、沙翁の句の解剖がなさ

れ、位置づけられたのであった。

もともと、漱石のとり上げている、沙翁・デフォーの文例は、みずから講義の中で、挙例の際、ことわっているように、「先達で大文学で講義の時に引用した例」であった。それは、「漱石全集」第十九卷所収「文学評論」の第六編「ダニエル、デフォー」と小説の組立の中に、つぎのように述べてある。

「もし文章の一端に詩と名づけるものがあつて、反対の極端に散文と云うものが控えているならば、もし詩が道楽で散文が用事とすれば、もし詩が面白い座談で散文がさつさと片付けべき懸合事とすれば、デフォーは決して詩に触れない男である。触れ得べき性質を有していなかったのみならず、触れる事を屑しとしない男である。否、頭から詩を軽蔑した男である。デフォーの作物を多少でも研究する為に、一寸した例を挙げる。

茲に二つの句がある。始めは沙翁ので、後のはデフォーのである。之を比較するのはたゞ調子を見る為で、あらゆるデフォーを此比較で律する積ではない。

- a. Uneasy lies the head that wears a crown.
- b. Kings have frequently lamented the miserable consequences of being born to great things, and wished they had been placed in the middle of the two extremes, between the mean and the great.

雙方とも内容は似たものである。けれども一方は詩で一方は散文になつてゐる。一方は凝った言い廻しかたで、一方は尋常な話し具合である。一方は人を留まらせる、一方は人を走らせる。一方は考

えさせる、一方は一字毎にはきく片付いて行く。好嫌は人により又場合によるのは無論であるが、何故ぞう云う相違が出るのだろうかとなると、此結果を解剖して見なければならぬ。

沙翁の方は帝王が一年中(十年でも二十年でも)宜しい、彼が位にある間は何日でも)の状態を一刻につづめて表わしている。

unsteady 日本語に訳すと不安となるが、此字がよく利いた字で、例えば足の折れた椅子に腰を卸した不安であるとか、スボン釣が擦り落ちそうで不安であるとか、凡て長時間の経過を待たないで、すぐ眼に映る状態の不安を示している。次に来る the 横わるという字も視覚に訴える字である。第三の head 即ち頭は勿論の事である。crown も其通り。すると冠を頂く頭は安からずと云う句が如何にも明瞭に眼に浮んで来る様に鮮やかに出来ている。で其状態は如何なるものであるか、苟くも其状態のつゞつて来る事があるから、苟くも其状態のつゞつて来る事が出来るのだから、全部を代表する断片的の句の様なもので、之を外の見地から説明すると、十年乃至二十年の状態を一瞬の間に煎じ詰めた句だとも云える。それから時間をつづめる許ではない。帝王という大きなものを冠の一字で代表させている。この字が適切であるがために、丁度度の合わない雙眼鏡の度が合った様に、帝王が明かに見え出して来る。

デフォーはこんな技巧をやっていない。長いものは長いなり、短かいものは短かいなりに書き放している。いくらぼんやりした遠景でも肉眼で見ている。度を合せない許ではない。始から雙眼鏡を用いようとするのである。まことにまともなものであるが、悪く云えば知慧がない叙方と云ても可い。庄味や気障は決して出ないが、

器用とは云われない。否心配して読者の便宜を計つて呉れない書き振とも云える。もしくは伸縮法を解せぬ、弾力性のない文章と評しても構わないだろう。汽車汽船は勿論人力車さえ工夫する手段を知らないで、どこ迄も親譲りの二本足でのそく歩いて行く文章である。そこが散文である。散文とは車へも乗らず、馬へも乗らず何等の才覚がなくって、唯地道に御拾いで御出になる文章を云うのである。是は決して悪口ではない。歩行は人間常体の運動である。軽業よりも余程人間らしくって心持がい。けれども年が年中足を撞木にして火事見舞に行くんでも、葬式の供に立つんでも、同じ見でてくく遣っているのは本人の勝手とは云いながら余り器量のない話である。デフォーの作物を批評する冒頭に於て先ず是丈を承知して置いて貰う。」(同上「漱石全集」第十九卷、「文学評論」、昭和32年3月27日、岩波書店刊、三五八―三六〇頁)

講義「文学評論」は、「もと『十八世紀英文学』という名前で、『文学論』の講義がすんだあと、明治三十八年(一九〇五)九月から、漱石が大学をやめて朝日新聞に入社する明治四十年(一九〇七)三月まで、一週三時間ずつ一年半にわたって、東京の大学で講義された。漱石三十八歳から四十歳へかけての年のことであ」(同上「漱石全集」第十九卷「解説」、小宮豊隆)った。

この「講義」における、沙翁・デフォー両句の考察は、デフォーの作物を批評するにあたって、デフォーの作品に見られる「調子」を、あらかじめ入門風に紹介することであつたから、当然のことながら、デフォーの文の分析に主点がおかれ、沙翁の句のほうは、比較的簡略に述べられていた。

漱石の講演「文芸の哲學的基礎」においては、講義「文学評論」

十八世紀英文学」の際の引用例を利用しつつも、力点は沙翁の句における効果的な技巧の解明におかれるに至った。沙翁の句の解剖は、いっそう綿密になり、徹底してきている。それは、「講演」の目的の一つが文芸における技巧の有効性を明らかにするところに置かれていたから、自然沙翁の句の解剖に力が注がれたのである。

埴内松三先生が「センテンス・メソッドの理論的基礎」を説くのに、実例として引かれたのは、右に見てきたようないきさつに立って解剖されていた、沙翁の句に関する漱石の精細な言及であった。そこでは、デフォーに関する解剖は、はっきりとはずされてきた。埴内松三先生としては、作風論・技巧論の実例として漱石が扱ったものを、むしろセンテンス・メソッドの基礎にあるものを明らかにしていくため、実例として引用されたのであった。

埴内松三先生は、前掲のように講演記録「文芸の哲学的基礎」の中から、漱石独自の沙翁の句の解剖・解釈例を、センテンス・メソッドの理論的基礎づけを志向する視点に立って、実例として引用されたのち、つぎのように述べられた。

「『真正なる批評は直下に会得したものを退いて解剖したものに過ぎない』と他の場合に夏目氏のいわれた語を思いくらべて見ると、以上の解剖の前に既に直下の会得がある。沙翁のレンズを透して長時間と広空間を一瞬の裡に収めて居られると見ることもできる。その精緻なる解剖の結果として確められたものは既に直下に会得せられたものであって、その結論はその再構成であると思われ。ヒューイが『文は思想の統一的表现である』といったのも、ヴァントが『文は総合的にして分解的なる過程である』とも『同時的・継続的なる全体』であるといったのも、この作用を明らかに示すも

のと考えることができる。解剖の前に直下に会得したものは、文的総合的同時的なる統一体であるが、それは通読作用の第一の終点であり、解剖の後に来る帰結は第二の終点である。二つの意味に於ける終点の間に解剖を接続して考える時にセンテンス・メソッドの立場が明かになる。解剖は説明推論の作用に過ぎない。『もしなぜと訊ねられぬなら、よく文の意味は分つて居るのです』と答えた少女の詞も思い出される。センテンス・メソッドの起点は自己の内面的活動の上に在るのであって、機械的な皮相的な分析解剖の上にあるのではない。白隠が従前手脚を挟むことも歯牙を下すことをも得ざる難信・難解・難入底の一著手、根に透り底に徹して透得過して大歡喜を得たというのも、これと同じ心境を語るものであろうと思ふ。」(有朋堂版「国語の力」、三二一—三三二)

これによれば、埴内松三先生は、漱石の精緻なる解剖の前に、既に「直下の会得」があったとされ、センテンス・メソッドの起点を自己の内面的活動(直下の会得)に求められたのであった。

漱石みずからは、すでに引用したように、
「私は先達で中デフォーの作物を批評する必要があって、其作物を説直すときに偶然此句に出合ひまして、不図沙翁のヘンリー四世中の語(引用者注、*Uneasy lies the head that wears a crown*)を思い出して、其内容の同じきにも関らず、其感じに

大変な相違のあるのに驚きましたが、何故こんな相違があるかに至つては解剖して見る迄は判断と自分にもわからなかったのであります。そこで是从から御話しをするのは私の当時の感じを解剖した所でありませう。」(同上「漱石全集」第二十巻、六八—六九頁、傍線は引用者。)と述べているのである。

傍線部 1 は、「直下の会得」にあたり、傍線部 2 は、退いての「解剖」にあたるであろうか。デフォリーの句に偶然出合い、ふと沙翁の句を思い出した時、漱石にはすでに沙翁の句が生きていたのであった。それは「直下の会得」の一つの態と認められるものであつたらうか。両句を比べることによって、内容・印象の異同に気づき、それは驚きにまでなつた。ここにおいて、「解剖」への契機は成立し、精緻な「解剖」がなされるに至つた。

漱石の「解剖」の実例は、講演「文芸の哲学的基礎」において、精緻をきわめ、整然となされていることは、すでに見たとおりである。ただそれは、沙翁の句の詩的と感ぜられる所以の究明であり、「技巧」の考究であつた。そこでは、漱石の「解剖」のみごとさが重量感をもって迫り読者をして驚嘆させてしまう。それは「既に直下に会得せられたもの」の「再構成」のみごとさであつて、「直下の会得」そのものの論及ではない。「直下の会得」は、その性質上、これを精細に客観化しうるものではなく、それだけ垣内松三先生としても、このような、すぐれた「解剖」事例を示し、それによつて「直下の会得」の問題を示唆し、そこからセンチンス・メソッド（全文法）の起点・出発点の問題に論及しようとしたのであつた。

もちろん、垣内松三先生の念頭にあつたのは、「真正なる批評は直下に会得したものを退いて解剖したものに過ぎない」とする漱石の語である。「退いて解剖したもの」、漱石の沙翁の句の検討は、まさにこれにあたり、「解剖」の名に値する成果を示している。

講演「文芸の哲学的基礎」からの引用は、漱石の批評観とその解剖の実例として、垣内先生によってなされたと思はれるのである。

「直下の会得」（驚き）——精緻な解剖、この解釈姿勢は、垣内

松三先生の好んでとられるところであつた。垣内先生は、そこに解釈の道を見いだしていられた。そういう解釈姿勢を持される垣内松三先生に、漱石の「解剖」（批評・解剖例）が典型の一つとして映じたであろうことは、推察するにたたくない。ここに批評者（解剖者）漱石との出合いを認めることができる。

（昭和42年11月5日稿）（本学教授）